



職員とともに歌う入居者たち



自慢の喉を披露していた



職員もタンバリン片手に参加



楽しくなって思わず顔もほころぶ



歌う前には体操を怠らない

一人ひとりの やり取りから 「どんな人か」 「何を求めるか」 見極めて反映

千葉県北西部に位置し、商業施設が立ち並ぶ都会的な一面と、1200年を誇る布施弁天などの文化財が残る歴史的な一面を併せもつまち・柏市。市内の大通りから細い路地に入り、進んだ先の高台に建っているのが、社会福祉法人新柏会が運営する特別養護老人ホーム「新柏ヴィヴァンホーム」だ。

取材日のこの日は、新館1階の共有スペースでカラオケが行われていた。ミラーボールが光り雰囲気たっぷりななか、テレビ画面から流れる音源に合わせて、入居者が自慢の喉を披露。ほかの参加者も、手拍子を送るなどして楽しんでいた。

施設名であるヴィヴァン（Vivant）は、フランス語で「いきいきした」や「活発な」という意味がある。その言葉どおり、一日の流れでもメリハリが付くようにとさまざまな活動を取り入れている。前述のカラオケがその一例だ。ほかにも映画や絵画など、種類はさまざま。

「一人ひとりがいきいきと過ごせるような、生活にメリハリが生まれる環境を提供できるよう、こちらでも支援しています」と、生活相談員の渡辺諭子さんは話す。

加えて、同施設が重視していることは「入居者を中心に考える」こと。至極当たり前のことではあるが、業務に追われているとどうしても職員都合を優先した行動になりがちだ。そのため、きちんと直接コミュニケーションを取り、何を求めているのか拾い上げているという。

「直接話をしてみても、どんな反応を返してくれるか見ることが大切だと思っています。業務をしていると、どうしても職員の都合が進めがちになってしましますが、それでも入居者の意向が置き去りになってしまふ。そのため、入居者のことをきちんと観察して、それをケアに反映していくことを第一にしています」と、生活相談員の大町憲吾さんは日々のケアについて話す。

一方で、入居者の意向にただ沿うだけではさまざまなリスクを伴うこともある。そのため、施設長の上野克也さんはなぜそのような判断をしたのか、根拠を示すことを求めている。

「ご入居者のことを第一に考えることはとても大切ですし、現場のことをよく知っている職員の意見を尊重することは私自身も念頭に置いています。しかし、良かれと思ってしたことが最悪の場合、法令違反につながってしまうこともある。なので、たとえば些細なことであっても『なぜなのか』を考えてほしいですし、たとえばほかの職員と打ち合わせをしたのならば、その記録を残してほしいと伝えています。それがなかなかなってしまふと、何でも許される風潮になってしまうので、早めに判断しています」

続きは、本誌4月号をご覧ください